
俺と花畑

あーもんどツリー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と花畑

【Nコード】

N0393DT

【作者名】

あーもんどツリー

【あらすじ】

ある時、《俺》は眼が覚めると見知らぬ場所にいた。しかも記憶がない。

一体俺はどこから来たのか、なぜここに来たのか。

異世界で女の子と恋愛しながら謎ときしていく。

そんなお話です。

始めまして

頬を吹き抜けて、風が走り去っていった。
憎いほどの爽やかな朝が、俺の眼を覚ましていく。

「・・・どこだ、ここ」

辺りには木、木、木。

森を成した木々が連なるばかりの、森林の中で寝ていたらしい。
なぜそんなところにいるのか、俺ですら解らない。

昨晚、いや先々日、・・・もっと前から、記憶がない。そもそも俺
は何者なのかさえ、自身で解らない。

何でなんだ、何でこんなことになっているんだろうか。俺は少しパ
ニックを起こしていた。混乱するのも訳ない。朝眼が覚めると見知
らぬ地で独りぼっちなのだから。

しかし俺の勘は一つだけ確かなことを察していた。

俺が今いるここは、《何か》の巣だ。しかもなかなかでかい、恐ら
くは肉食の獣のものだろう。辺り一面に肉付きの骨が散乱している。
逃げる、と本能が訴える。

俺は立ち上がろうとして、気づく。
奴が来た。

それは巢の主。言い換えるなら俺を食う為ここへ連れてきた奴。
万事休す、俺の脚はクモの糸のような粘着質のものに囚われていた。
これでは逃げようにも逃げられない。

ガサガサ、と背の高い草の間を縫って奴は着実に来る。
目の前の草が揺れた。奴のお目見えだ。

「起きてたんだ、よう人間」

俺は目を疑った。

そこに来たのは女の子だったのだ。

言葉こそ荒いが、クリツとした眼、長いのを後ろで束ねた髪かみ、そして着ていたホットパンツなどは、いかにも女子のそれだった。

「・・・アレ、意外と落ち着いてるね？」

などと、俺の状況を全て解っているような素振りをする。

「ここはどこだ？」

癪げんせきに障さわったものの、俺はこの状況を打開すべくその女の子に質問してみることにした。

「うつん・・・何て言えばいいんだろうなあ・・・。信じないかもだけど、ここ、アンタの居た世界じゃないの」

はあ？

最もらしい展開。見知らぬ地で眼が覚め、出会った最初の人物が女の子で、ここが異世界だと言う。何というテンプレなんだろうとか全く。

「だろうな」

「やっぱし驚かない。アンタ大丈夫？」

驚くのが正常な反応なんだろうか。正直その辺は判らない。

そついや最近感動したことないよなあ。アパシーとかいうやつだろうか。

「異世界、ねえ・・・」

やはり、とは思ったが無感動な自分。

「・・・あ！そうだ、アンタ名前は？」

「すまないな、覚えてないんだ」

「やばい、それはやばいよ!!」

何がやばいのか解らない。ましてそれはどの《やばい》なのか。

「・・・来た!!」

え？とその女の子の視線を追う。

その先を見る前に、空が翳る。

「・・・ツ!!」

とてつもなくでかい。その一言に尽きる。

島一つ分はあるうかという岩が空を飛んでいた。

「《ギリ又エウロ》・・・」

女の子はそう呟いた。

その言葉が何なのか、その時はまだ知る由もなかった。

空を飛ぶ岩はそのまま去って、翳りが消えた後。

「・・・何もしてこなかった」

「？」

「アンタにはそのうち話すさ。嫌でも」

どういうことなのか、やはり分からなかった。

その後、彼女は俺を村へと連れていった。そこは彼女の家がある、
いわば故郷のようなものだ。

「ここへ入って」

言われるがまま、俺は案内されたある一つの民家に入った。
中は薄暗かったものの、その中に数人の人がいることが気配で察す
ることができた。

その中の一人、恐らく長老にあたる人（といっても若い女性なのだ
が）が俺を見るなり言ってきた。

「・・・貴方ね、こちら側へ来た外来人とやらは」

「多分そうなるな」

「早速だけど、貴方に哀しいお知らせをします」

なんでそうなるのか。

「貴方はもう二度と、ここから帰れません」

だからなぜにそうなるのか。

「哀しいけれど、これが運命というものよ」

なぜなんだ。周りの人まで泣いているが、アンタら関係ないだろう。

「時に残酷に、運命は人を弄ぶ。それはもう、むごいほどにね・・・」

「
大分痛いことを云っているこの人、本当に長老なのか・・・？」

「教育係は貴女よ、《杜若》^{かきつばた}」

「ええ、私ですか？」

と言って立ち上がったのは先ほどの女の子だった。

彼女、《かきつばた》と言うのか。変わった名前だなあ。

「・・・仕方ないです、ね。アンタ、来なさいな。やることがイッ
パイあるから」

「・・・お、おう」

こうして俺の、なんか変な新生活がスタートしていった。
先行きが思いやられる。

俺の名前は（前書き）

俺の名前が決定します。

俺の名前は

「アンタの名前決めないとね」

杜若かきつばたというその娘は記憶がない俺にそう言い、俺の顔をまじまじと見て色々呟きだした。

「椿つばき……男郎花おとこえし……靱蔓じつぽかずひ……？」

色々言っではいるものの、どれもしっくり来ないらしい。

「……俺の名前、仮のものだからさ」

そう。記憶を失っているだけで、俺にはきつと別に人生があつて、無論名前だつてある。

「……それじゃあ蠅取草はえとりぐさ？」

「断る」

なぜに食虫植物なんだよ！！

酷くない？俺人だよ？！

「困つたなあ……今日中に決めないと後が詰まるんだよなあ……」

「……後、つて？」

「戸籍登録こせきしないとアンタ、消滅するんよ？」

「……」

頭の中が白く染まる。

そして理解が追い付くと同時に沸き上がった、恐怖と焦り。

「それを早く言えよ！！こんなところで消えたかないね！まだまだやることあるんだからな！！」

考え中……。

散々アイデアをひねり出した挙げ句、やはり決まらなかった。

俺は消えるのか……？

「お悩みのようね？ 外来人さん」

思わずあつ、と声をあげた。

それはあの若い長老だった。

「なんなら私が付けて差し上げるわよ？ ……私、花言葉には詳しいの」

おお、これは期待できそうだ！

俺は不覚にも安堵あんどしてしまった。

「……それは《勝利》の花。紫陽花あじさいなんてどうかしら？」

そうなのか、と関心していると、杜若が突っ込んだ。

「……あじさいの花言葉は《裏切り》と《浮気》ですよ」

沈黙。

長老は言葉を失って唾然愕然あぜんがくぜん。

やってしまった、というのを顔で体現している。

わなわなと震える長老。雷に打たれたような衝撃だったのだろう。

「……そう、ね。今のは試したのよ」

嘘八百だ。さっきの顔を見て誰が信用するのか。

「そういうことにおきます」

そうなるわ。と俺は内心思っていた。

「……で、その《勝利》の花、つてのは？」

「・・・それはね、《月桂樹》よ」

ああ、聞いたことあるな。

天使の彫刻なんか被ってるアレだな、と簡単に想像できた。

「格好良いけどさ、言い辛いじゃないか？」

「ええ、言い辛いわよ？」

「・・・皆、急ぎの場合は縮めて呼ぶから」

杜若が教えてくれたおかげでなるほどね、と合点がいった。

「私の場合はカツキーとか言われてる」

「そりゃ良いや」

そして俺はそのまま月桂樹の名を授かり、《外来人さん》を卒業してきた。

これでここで暮らせる、と思っていた。

「くだららないですよ、まだやることあるのに」

あ、まだ名前ももらっただけじゃないか。

他にまだ何もしていなかった事を、俺というやつはすっかり忘れていた。

「ほら行くよ？《けー》」

「うん？《けー》？」

「・・・縮めた」

少し顔を赤くしているものだから、可愛い。

「ほら行くよ！ー！」

「・・・おっ」

家を探したりこの世界の勉強をしたり、やることはまだ沢山あったが、それはまた別の機会に記すことにしよう。

俺は月桂樹。外から迷いこんだ《勝利》の花だ。

月桂樹。

どうにか家を見つけ、俺は寒さをしのぐ事ができた。それもこれも杜若のおかげだ。

この世界の常識も、幾つかはすでに頭に入った。

まずこの世界の名前は《ガーデン》と言つらしい。俺のいた世界の言葉でいう《花園》である。

そしてこの世界では、人々は皆《花》の名前が付けられている。杜若だつてそうだし、俺に付けられた月桂樹も然り^{しか}。

多分あのインチキ臭い長老も何か花の名前が付いているに違いない。そしてこの世界にも、争いは存在する。

要するに《勢力》や《敵》もいるということだ。

「なあカツキー、この村はどの《勢力》だ？」

「ここは《中立地帯》だよ、どこにも属さない。そして敵は・・・
《ソウビ》かな」

そんな名前の植物もあるのか、と勉強になる。

確かにイガイガとした名前だ。きっとゴツいやつらに違いない。

「アイツらは争いが好きな野蛮なやつらさ。斑模様を戴いた^{いた}、危険なやつら」

だと思つた。

「おーいカツキー！いるー？」

と、誰かの声が聞こえた。それもやはり、女の子の声。

「アヤか……。いるぞー!!!」

アヤ？普通の名前の者がいるとは聞いていないのだが。

「入るよー……。」

と言つて入ってきたアヤ？と目が合う。

可愛い。ワンピースを着て、長く赤みのある髪を持ったその娘は、杜若とは違って確実に女子だ、と判った。

「……。」

しばらくの静寂の後、アヤ？は声を荒げた。

「誰!?!」

「ああ、コイツね。月桂樹」

「どうも……よろしく?」

アヤ？は困惑してはいたが、あいさつは返してきた。

「菖蒲あやめです、よろしく……。」

ああ、とフルネームを聞いてやっと判った。

あやめだからアヤか。

後で聞いたのだが、アヤはカツキーとは幼馴染おきななじみだという。どおりで親しいわけだ。

「カツキーに知らせなきゃいけないこと、あつてさ。……《プエラ》さん、帰ってくるって!」

「マジで!?!」

カツキーがやけに嬉しそうだ。

とても活き活きとした、見たことのない顔だった。

「……あの、さ。その《プエラ》さんってのは一体誰なんだ?」

「ああ、まだ来たばかりだからね。知らなくて当然か」

「《プエラ》さんは、この村の星なんだよ!!!」

なるほど、何となく解った。

《プエラ》さんとやらはスターなのか。何をした人かは知らないが。

「で、いつ？いつ帰ってくる!？」

「それがさ……」

緊張した空気。ピリピリとした、しかし嫌ではない雰囲気。期待に込める福音。

それは花言葉の通り、杜若【花言葉：期待】に対しての菖蒲【花言葉：朗報】だ。

「……明日!！」

「ヒイヒイヒイヤツツホオオウツツ!!!」

カッキーの、奇声のような喜びの声。

思わず吹き出してしまう。

「な、何だよ！喜んで悪いかっ!？」

「いや、……何か、可愛いな、って……」

ボムツ、と一気に顔が赤く染まる。

「さらつと恥ずかしい事言うなーっ!！」

それを見てアヤも腹を抱えて笑い始めた。

「な、何よもう……っ!！」

俺はそんな、何気ないことで笑い合える日々が、幸せで嬉しかった。

……?

今、何か違和感があったような……?

ガーデンと呼ばれるこの世界に

その日は奇しくも雨模様。

水嵩みずかさの増した川、過度に潤いぬかるんだ土壌どじょう、時々遠くで唸うなる雷いかずち・

「あのさあカツキー。《プエラ》さんってなんで《プエラ》さんなんだ？」

「《プエラ》さん、本当は葛くずなの。その名で呼ばれるのがあまり好きじゃないから、学名の《プエリア・ロバタ》を縮めて《プエラ》さんって、皆呼んでる」

へえ。プエリア・ロバタだからプエラさんか。

確かにくずと呼ばれて喜ぶ人はあまりいないよな。

と、村の入口の辺りが騒がしくなってきた。

何だろう、と思っていると誰かが叫んだ。

「気を付けるオ！！川が決壊したああ！！」

どよめきと同時に村人の群れは流れ始めた。

「皆どこへ動いてる！？」

「穴を塞ふさぐために川へッ！！」

人の流れはやがて広がり、足下には川から出ただろう水が激しく絡みついてきた。

「何で人で塞ぐ！？」

「資材がないのツツ！！」

何てこった。

そうこう言っている間にも川の水は村の中へ流れ込んでいく。

『手を取れええええ！！』

『肩組めええええ！！』

『【つた蔦の道】を護れええええ！！！！』

蔦？

一体何を……、と疑問に思った瞬間だった。

「来たぞおおおおおおおツツ!!!!!!」

目の前すれすれを緑が駆け抜けた。

視界を埋め尽くすその緑は、他ならぬ蔦だった。

とても巨大な、葛の蔦^{くす}だった。

「《プエラ》さん……!!!」

杜若^{かきつばた}の視界の先、遙^{はる}か遠くに一つの人影。

アレが、と一種の感動さえ覚えた。

不思議な蔦を繰り出したその人こそ、杜若が奇声を発するほど待ち

わびた、村のスター。

村の皆が憧れる、ホープかつヒーロー。

プエラリア・ロバタ。《プエラ》さんだった。

川の決壊はその後、プエラさんの蔦^{つた}によって埋められた。蔦すごい。

落ち着いてからは本当に凄かった。

プエラさんと話したいファンたちがこぞって列を成し、最早お祭り状態。

村はその日中、異常なまでの活気に満ちたのだった。

葛【花言葉・活力】

迷いこんだ外来人だ。

「なあ！藤さんはいるかい？」

と、プエラさんは村人に聞いて回っていた。

「なあカツキー、藤さんて誰だ？」

「藤さんはプエラさんの幼馴染で、プエラさんが心を寄せている人さ」

要するに片思い中の人、と杜若は言った。

プエラさんはある民家に入っていた。

そこは藤さんのいる家だという。

カツキーいわく、あまり外に出ない人だという。

「生まれつき病弱なのさ」

という。

「いつもプエラさんは、藤さんに逢う為に帰ってくるんだ。そう、藤さんに・・・」

杜若はプエラさんの事が好きらしいが、プエラさんは藤さんが好きである。

三人とも女子だから、いかなものなのか。

「カツキー、当たって砕ける、って言葉知ってるか？」

「知らないわけないでしょ」

「じゃあ実践してみたか？」

カツキーは言葉を詰まらせてしまう。

「・・・しない」

「今こそやってみないか？」

「無理に行かせるものではないわよ、外来人さん？」

背後からの声。俺を外来人呼ばわりするヤツは一人しか想像できなかった。

「・・・あんたか、長老」

「フッフ、正解。・・・乙女おとめの恋は何も叶えるだけが全てではないの。この意味、男の貴方に解るかしら？」

「・・・解らん」

解ったらそれはそれで気持ち悪がるうに。

「・・・叶わぬ恋もまた良いものよ」

理解できねえな。

結局杜若はプエラさんに声を掛けぬままだった。
プエラさんはもうすぐ帰ってしまうというのに。

彼女は皆の期待と声援を一身に受け、再び旅立って行った。
杜若の好きな人。

その夜。

俺は薄手の布団を掛けたベッドに横たわっていた。

この家、設備がかなり良い。

冷房は付いているし、収納も結構ある。

《ガーデン》ではかなり最先端だという。

そんなリッチな家の中、その片隅で寝転がっていた俺は、その気配に気づかなかった。
衣擦れの音すらしなかったとはいえ、気がついたってよかったと思う。

寝返りを打つと、そこには杜若がいたのだ。

「……どうした？」

「……」

応える声はない。

目を閉じているが、彼女は起きている。

「何で返事してくれないんだ？」

「……」

うつむ、解らない。

仕方なく、その日はそのまま眠ることにした。

次の日。目が覚めると杜若はまだそこにいた。

あのまま寝ていたのか、と思わず笑みがこぼれた。

「……起きろカッキー。朝だぞ」

「起きてる」

目を閉じているが、その声は確かに起きている者のそれだった。

「昨日はどうしたんだ？俺の布団に入ってくるなんて」

昨晚、実は内心ドキドキしていたのは言わないでおこう。言うだけ野暮だ。

「……寂しかった」

意外だった。いつもハツラツとした彼女でも寂しいこともあるんだな、と俺は思っていたのだ。

「そっか」

「軽くない？」

「・・・怒ってるか？」

「無論」

弱ったな、俺はこういうとき、どんな言葉をかければいいのか、見当がつかない。

「・・・ごめん」

「違う。そんな事言っただけで欲しくない」

何を言っただけで欲しいんだ？

言ってくれないと、俺には解らない。

「・・・気付いてよ、このくらい」

というと杜若は、俺に飛びかかってきた。

「なッ・・・!!!!」

そのまま彼女は俺の胸の中に入り込んだ。

「埋めてよ・・・スキマ」

「え？」

「心のスキマ埋めてよ!! 嘘でもいいから『お前が好きだ』とか言ってくれてもいいじゃん!! 全く、最後まで言わせないでよ・・・バカ」

と言うと、そのまま俺の胸の中で泣き出してしまった。

俺はそんな彼女の頭を、落ち着くまでただ撫でる事しか出来なかった。

杜若は、【自分が好きな人】の代わりに【自分を好きな人】を求めていたらしい。

気付いてあげられなかった事が、俺は悔しくてたまらなかった。

だから、遅いかも知れないが言おう。

埋め合わせにもならない、青臭い言葉を。

「俺はカツキーにとって何か、言って欲しい」

「・・・え？」

「言って欲しい。俺はカツキーの何？」

心臓がメチャクチャな鼓動をしている。

とてつもなく速い、そして小さい鼓動。

多分俺の顔は今、真っ赤になっている。

恥ずかしさと緊張、その他色々ごちゃ混ぜにした感情が、俺を襲つ。

「・・・アンタはっ、アンタは私の・・・っ」

みるみる顔が赤くなり、語尾にむかって声が小さくなっていく。

杜若は見たことのない顔をしていた。

高熱があるのかと思うほどの赤面、目線は泳ぎまくり、あからさまに動揺している。

「ア、アンタは私の・・・っ、・・・よ・・・」

「聞こえない。もう一回言っつて」

「私の、・・・恋人になつてよ・・・！」

あまりに緊張したのか、言うなり杜若はふらつき、俺はそれを支えた。

そのまま彼女は眠ってしまった。

その寝顔は、天使かと思うほど可憐だった。

「・・・おやすみ、・・・カッキー」

《ガーデン》の人たちは皆、名前が花なんだ。

水が足りない。

ここ数日雨が降っていないせいもあって、全国的に旱魃かんぱつしてしまっ
た。

《ガーデン》には関係のないことと誰もが油断していたのだろう、
どこもかしこも貯水などしていなかった。

「のどが・・・かわ・・・い、た・・・っ」

村人もすでに半数近くが乾き倒れ、残りの半分も数日もつか怪しい
状態だった。

そんな中俺はどうかというと、乾いていなかった。

厳密には《乾くはずがなかった》のだ。

俺はもともとこの世界の者ではない。この世界の乾きは、俺の感覚
でいえば8帖ほどの部屋で部屋干しした時くらいの湿度、全然余裕
である。

杜若は完璧にダウンしていた。

先ほどから水着姿で、床の冷たいところを探して家の中をさま迷って
いる。

「皆参ってるわねえ」

「どうも長老さん」

いつの間にやら、村の長老が俺の部屋に上がり込んでいた。奇しく
も《ガーデン》には不法侵入なんてものはない。

「お茶飲むか？麦茶とか」

「私紅茶がいいわね」

「紅茶はない。すまん」

だと思っただと、と笑われてしまい何か悔しかった。

「それより、ダウンしてるアヤちゃんに代わって朗報よ」

ああ、菖蒲ちゃんもダウンしたか。

何となく想像していた事ではあったが、いざ想像通りだと何とも言えない気持ちになる。

「午後、蓮華が来るわよ」

俺より先に杜若が反応した。

「そりゃ助かる！！」

蓮華。普段は頼りない文系眼鏡女子。

だが、水分不足に関するSOSを察知すると彼女は豹変する。彼女は来るべき時、救済の女神と化するのだ。

蓮華【花言葉：助けて下さい・救済】

「・・・で、その蓮華さんはどうやって水を？」

「貴方、蓮華がどう咲くかご存じ？」

質問に質問で返すか、この長老。

だが困った。反論したいが咲く姿を知らない。

「池などの水面に浮かぶように咲くのよ」

え？それってもしかしてもしかすると・・・。

「もしかしくなくても、その池の水を与えてくれるのよ」

マジか、池の水を飲むのか？

「飲むわよ、る過くらいはするけれど」

そりゃ当然だろう、まんま飲むヤツはいないぞ？

「蓮華ちゃんはそのまま飲むわよ」

そうなのね。

そして真昼を少し過ぎた頃、長老の朗報通り彼女はやって来た。

銀色のゴツいタンクを肩に担いだ、眼鏡の女神。

華奢で豪快な水の申し子。

蓮華。

「・・・お水、どうぞ」

見た目通りの可愛らしい声。

だがしかし重そうなたんくを肩で担いでいる。

のどが潤され、食道を通って胃の中へ入っていくのが解った。

ひんやりとして、キリツと澄んだ口当たり。水ってこんなに美味しかっただろうか？

こんなに美味しい水なら、皆きつと・・・。

その後3時間足らずで《ガーデン》の早魃^{かんぼつ}は解決した。蓮華ってこんなに凄いのかな。

タンクが空になるその瞬間を、俺と杜若は眺めていた。ピチヨン。

最後の一滴が滴^{したた}り落ちる。

と、同時に蓮華ちゃんの体が大きく反った。

「えっ、アレ大丈夫か!?!」

「まあ見てな」

仰^のけ反った反動でタンクを落とす。

ガコンッ!!

その音で、ふっ、と糸が切れたかのように倒れた。

「倒れたぞ、行かないと!?!」

「落ち着けて」

制止されたまま様子を見てみると、むくっ、と起き上がったではないか。

そして眼鏡の女神は、ただの文系女子に戻った。

「……あ、どうも……」

「ありがとうな、蓮華!」

杜若はいつも通り活き活きとした笑顔で、そう蓮華ちゃんに叫んだ。

「……はいつ!?!」

杜若はきつと、無理をしている。
だがそれを誰にも見せないように、皆に笑顔を振りまいているんだ。
きつと。

彼女の昨日の姿が脳裏に浮かんだ俺は、何となく心配になっていた。

だが。

彼女の笑顔は、皆に伝播でんぱしていく。

今さつき、彼女が蓮華ちゃんに叫んだ時、その笑顔は蓮華ちゃんにも移った。

きつと彼女は、……。

その日の夜、俺は眠れなかった。

自分の考えた過程かていが正しければ、彼女の持つ力は、《ガーデン》の勢力図を根底から覆くつがえすほどの代物しろものなのかも知れない。

「……気付いたのね、外来人さん」

「長老……！」

俺が最初に会った娘は杜若（かきつばた）っていったさ

「そうよ。彼女は未知数の力を保持しているわ」

やはりそうか、と想像通りの答え。

だがそんなに強力な能力なら、次に来るのは当然……。

「ただし、代償付きの諸刃もろはの刃やいば」

だろうな、と俺は思わず声に出してしまった。

「あら、意外と驚かないのね？」

「……想定はしていた」

そう、とほほえむと長老は家のキッチンに立った。

「夜は長いわ、紅茶を淹いれましょう」

この世界の者は皆、それぞれ【花言葉】にちなんだ能力を持っている、と長老は言う。

プエラさんであれば【活力】を人々に与える。

蓮華ちゃんなら早魅かんぼつを【救済】する。

といった感じだ。

「そして」

淹れてから時間が経ち、少しぬるくなった紅茶を音を立てず啜すすり、

長老は口を開いた。

「この娘、杜若の【花言葉】は【期待】。能力もまた然しかりよ」

「……」

俺はその発言に疑問が浮かんだ。

「……【期待】することは、能力なのか？」

「そうじゃないわ」

即答、そして完全否定。

「【期待】すること自体は能力ではないの。
彼女の能力は【その後】から始まるわ」

【期待】する事で、人々はそれに応えようとする。それは即ち、人々の隠された力を引き出す事ができる、ということらしい。

杜若の能力は、簡単には出来ないそれを、簡単に出来るのだ。

「他の能力を強制的に解放する。それが彼女の能力よ……貴方に、この意味が判るかしら？」

確かに凄い能力だ。

他の人の能力を解放出来るのなら、この村はあっという間に最大勢力となる事も可能だろう。

すっかり冷たくなったストレートの紅茶を飲み込んで、俺は深く考えてみる。

能力の解放、他人への干渉、……違う。問題なのはもっと別のところだ。

「……解らない時くらい、頼ってもいいのよ」
長老はぼそつと呟いた。

「貴方は一人で背負い過ぎているのよきつと。

杜若だって、きつと頼って欲しかったはず。

頼って欲しかったし、頼りたかったはず」

「……解った。……教えてくれ」
フフフ、それでいいのよ。

と長老は笑い、次はベルガモットを淹れてきた。

まだまだ夜は始まったばかりだった。

「・・・それって、使ったらダメだろう!？」
「シッ! 静かにしないと彼女起きるわよ」
「・・・すまん」

杜若の能力の代償の大きさに、俺は最早考えが回らなかった。
「・・・とにかく、来るべき時まで口外は無用よ。言ったら・・・
解るわよね?」

「もちろん」

「これでお開きにしましょう。さ、若者は眠りなさいな」

アンタだってまだ若いだろうに・・・。

「あら、私これでも五十路よ?」

「マジか!？」

「嘘」

静けさが襲う。

「・・・寝る」

「おやすみなさい、外来人さん」

気が付くと長老の姿は消えていた。

一体なんだったのだろう。

・・・そういえば、長老の名はどんな花のものなんだろう。今度聞いてみることにしよう。

さすがに明日は起きれるか不安だ。

ひとまず布団に潜り、俺はこの長かった一日にピリオドを打つことにした。

隣にいる杜若。

彼女の安心した寝顔を見て、俺は少し落ち着くことができた。

「・・・おやすみ、・・・カッキー」

瞳を閉じて、明日に想いを馳せながら、俺は深い眠りに落ちた。

・・・と、説明している余裕がなくなってきたな。

視界に真つ白な天井が映っている、という事に気づくまでかなりの時間を要した。

俺の家の天井は木造の茶褐色だ、と記憶しているから、何となくそこに映るものが天井だとは思ってなどいなかったのだった。そして何というか、全身がだるい。

こういうとき、大体は【体が動かない】とか言うのだろうけれど、俺の場合、残念ながら【体を動かしたくない】としか言いようがない。
怠惰たいだの塊かたまりと化した俺に、ほほ笑みかける誰かがいた。女性だった。しかもかなり美形の。

「おはよう」

「・・・おはよう、？」

妙な返事をする俺に、彼女はクスクスと笑った。

「変なの、フッフ」

そこは帰ることの出来ないはずだった、現実。

俺の故郷であり、本来いるべき世界。

そして俺が数日前まで普通に生活をしていた場所、【現世】だった。

俺は【こっち】では普通の高校生として、普通の生活をしているはずだった。

「夢でも視たの？」

と、笑う彼女は俺の家族ではない。それどころか、見たことすらない人だ。

「・・・そうなのか、な？」

と、俺はやはり曖昧あいまいにしか返事が出来ない。

夢にしてはリアル過ぎて、現実にしてはファンタジック過ぎる【あの日々】は、一体何だったのか。

「フフフ、やっぱりササキ君は面白いね」

「・・・俺のこと？」

「やだなあ、冗談冗談よしてよお」

「・・・ごめんごめん」

俺の中に記憶がない、と言ったら彼女はどう反応するのだろう。が、俺が少なくとも【ササキ君】だということは判った。

だが、まだほとんど何も解っていない。

今日がいつなのか、彼女が何者なのか、俺自体が何なのか・・・。

俺は結局、答えが解らないままこの今日という日を生きるしかなかった。

そうだ、学校行かなきゃ。

「行ってきます」

「どこに？」と止める彼女。

「学校だろ？」と当然のように言う俺に、彼女は疑問を投げかけてきた。

「・・・高校なんて行ってないでしょ？」

そうなのか、と俺は驚いた。

高校に行っていない、ということは俺は・・・。

と思いかけたところで俺は、脳裏に浮かんだ一つの疑問をぶつけてみることにした。

「・・・俺、行ってる学校が高校だなんて一言も言ってないよな？」

「・・・バレた？」

ととぼける彼女の眼は、しかし笑っていない。

「・・・誰だよ、お前」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0393dt/>

俺と花畑

2017年1月17日15時47分発行